沢田内科医院ニュースレター 第112号

季節外れの歓迎会

６月22日は歓迎会でした。看護専門学校の学生がいるので、３月末には必ず歓送迎会をしますが、他の時期に開くのは久しぶりでした。今回は、事務の齊藤ひろみさんと看護師の棟方孝奈さんの２人の歓迎会でした。

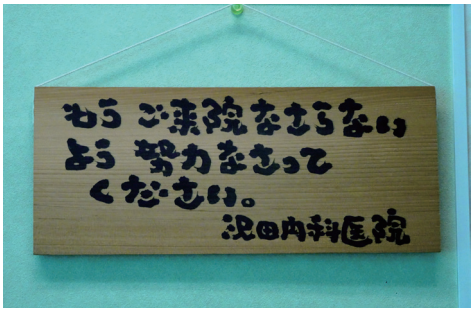
齊藤さんはこれまで市内の病院や医院で医療事務の仕事をしてきましたが、６月から沢田内科医院で働くことになりました。それなりの年齢だからというわけではありませんが、経験豊富なので自然体で仕事をしています。最近は、特定健診やがん検診などを初めとして、書類の山の中で仕事をしているような感じです。事務職員は４人ですが、受付は看護職員が担当し、検査技師の宇野さんが事務を手伝っています。

棟方孝奈さんは、この３月に歓送されたのになぜ？っと思う人がいるかも知れません。そうです、３ヶ月前に青森県立中央病院へ送り出したんです。でも、戻ってきました。自分が思い描いたこととのギャップが大きかったようで、古巣に帰ることになりました。これから、糖尿病療養指導士などの勉強をしながら看護師として研鑽を積んで行く予定です。

歓迎会の参加者は30人で、他に夜勤の当番、そして非常勤ですが管理栄養士の木田さんと開業医としては大所帯です。自分が思っていることをやろうとした結果、多くの職員が必要になりました。

医師としての仕事、医療の仕事は、むずかしい言葉でいえば「自己否定」の職業です。自分の仕事がなくなれば、人は幸せに暮らしているということです。病気にならないで元気でいれば、誰も病院には来ないのですから。でも、医院の経営は、患者さんが来てくれなければ成り立ちません。いわゆる二律背反です。

患者さんを診ている時にどうしたらいいか迷った時は、患者さんが病院に来ないようにするのはどうしたらいいかを考えて決めています。その結果が正解のことが多かったと思っています。診察室の壁には、相馬のんきさんが書いてくれた、「もう、ご来院なさらないよう、努力なさってください。」という木板を下げています。



医院で診察する時は、自分が外来患者さんに接する時間を長くするために、自分がやらなくてもいいことは他の人に任せています。ですから、自然に職員の数は多くなってしまうのです。内視鏡検査は自分がやるしか方法はありません。でも、超音波検査は他の人ができます。検

査技師の宇野さんが消化器超音波検査士の資格を取り、その役割を果たしてくれています。今は、澤田美紀子さんと相馬知香さんが超音波検査士を目指して訓練を続けています。糖尿病療養指導士も同じく、もっと時間を割いて指導するためのシステムです。高血圧や脂質異常症で通院している人たちも、もっと時間を割いて詳しく指導するために新しいことを計画しています。どれも、自分がやることをできるだけ少なくすると、かえって患者さんのためになると考えてやっていることです。

自分がやらなくてもいいことは他の人にやってもらう、患者さんが病院に来なくてもいいようにするためにはどうしたらいいか、つまり、自分が不必要になる状態を考えることを基本にすればいい方向に向かうと思いながら医院の経営をしています。でも、現実を考えると、患者さんが来てくれなければどうにもなりません。心の中では、まだまだ医師は世の中から必要とされているんだと考えているから、こんなことが言えるんでしょうね。でも、これは言えます、医療は自己否定の職業です。消防士、警察官、いろいろな職業にも共通します。

『親の職場訪問』　ｂｙ 石戸谷先生

５月17日、学校医を務める西目屋小学校の子どもたちの健診でした。西目屋村は、医療費を無料にしたり、若い人たちに住宅を用意したり、ある期間住み続けると土地が手に入るなど、子どもたちを増やす政策を次々と展開しています。先日の新聞によると、この政策により青森県でたった一つ、高齢者率が低下していました。

西目屋小学校の児童数は約60人です。お父さんやお母さんの名前を言われてもどこの子か全く分かりませんが、おじいちゃんの名前を聞くと分かります。ただ、西目屋村へ移り住んだ人たちの子どもが約半分です。私には、どの子がそうなのか名字を見るだけで大体分かります。

今回は、国立病院から地域医療研修に来ていた石戸谷美奈先生と一緒に出かけました。地域医療研修の一環として子どもたちの健康診断に行ったというのが表向きの目的で、実は本当の目的は別にありました。

西目屋小学校の石戸谷雅子校長先生は、石戸谷美奈先生のお母さんなのです。そこで、子どものための親の職場訪問にしようと計画しました。でも、ただ訪問したのでは面白くも何ともありません。そこで、サプライズ訪問としました。

石戸谷先生が弘大医学部に入学する前から、私はお父さんとお母さんとは知り合いでした。お父さんは、元弘前南高校の校長先生でしたし、お母さんも、自得小学校、百沢小学校に勤務していた頃から知っていました。

驚くことに、私は石戸谷先生のおじいちゃん、つまり、お父さんのお父さんも知っているんです。おじいちゃんは、仙台の東北大学内科出身の検査部の医師でした。私が大学を卒業して間もなく、40年近く前に血液学会で何回かお会いしたことがあるのです。そして、そのおじいちゃんが亡くなる前に弘前の自宅で療養生活を送っていた時に、私は往診に行ったこともあるのです。

石戸谷美奈先生は、健康診断の半分を受け持ちました。石戸谷校長先生がどんな顔をしてそれを見ていたのかは直接観察できませんでした。でも、ちゃんと聴診器を使って健診をやっているのを見て、きっと目を細めて眺めていたことでしょう。

「親の職場訪問」でしたけど、学校を見るだけで仕事ぶりを見ることができませんでした。結局、親が子どもが医師として活動しているのを見学する場面と化してしまいました。最後に、校長室の椅子に座ってもらい記念写真を１枚取りました。

『我師木鶏』

中国の古典「荘子」に「木鶏に似たり」という言葉があるそうです。木で造った鶏のように周囲の動きに心を動かすことなく、何ごとにも無心で対応することの大切さを教える言葉です。

昔、王様のために闘鶏を調教する人がいた。闘鶏の訓練を始めて十日後、王様がこの男に様子を訊ねると、「相手の鶏を見るとまだ虚勢を張ります。今少し訓練が必要です」と答えた。さらに十日経って王様が再び訊ねると、「まだ相手の動きに心を動かすところがあります」と答えた。さらに十日後に王様が訊ねると、調教師は「今度は大丈夫です」と答えた。その時の闘鶏はちょうど木鶏のようだという。何物にも動じないこの木のような鶏を見ると、どんな相手もこれと闘う気力を失って逃げてしまったというのである。

闘うためには闘争心が強く、体力と気力が充実に、相手を圧倒することが大切で、調教師はこのように鶏を調教するが、それでもまだ不十分だというのです。相手を威嚇したり虚勢を張ったりするうちはまだ本物ではない。人間は未熟なほど虚勢を張り、強がりを言うものです。何十年も修練を積み重ねると、てらいが無くなり自然体になる、それが大切なのだというのが「木鶏に似たり」ということです。

私が尊敬する小田桐孫一弘高校長は、「木鶏」は荘子の「期待される人間像」だと言います。しかし、理想像であるからどんなに努力しても「木鶏」にはなれない。しかし、志を立てて行動すれば、一歩でもそれに近づくことはできる。人間にとって大事なのは結果ではなく、道程における努力なのだと説きました。

小田桐校長は、私の２年先輩の卒業記念に『我師木鶏』と書いた色紙を配りました。この色紙はもちろん私は小田桐校長から頂きませんでしたが実は持っています。高校の２年先輩である前弘前市教育長の佐々木健先生から頂いたのです。小田桐校長の話をしていた時に、佐々木先生が、「『我師木鶏』の色紙を持っているが、自分が持ってるよりも、先生が持っている方が意味があるから」と私にくれたのです。全く遠慮もせずにありがたく頂きました。ありがとうございました。

なお、「木鶏」は、「もっけい」と読むことが多いようですが、小田桐校長は「ぼっけい」と振り仮名をしています。「随心ノート」の中に「木鶏」の話があり、色紙を頂いたことを思い出しました。

大谷和子さんから本を頂きました

先日、大谷和子さんから、小田桐校長の著書を３冊頂きました。その１冊が、小田桐校長が藤崎町教育長をしていた時に「広報藤咲」に連載したエッセーを編集して、「随心ノート」という題名で遺稿集として発行された本です。これまで長谷川正人さんから借りて読んだことがあるのですが、改めて読んでみると小田桐校長の理解がまた深まりました。大谷さんのお父さん大谷清蔵さんは講談社少年倶楽部の編集者、小田桐校長は文芸春秋の編集者として、同じ年代で同郷の者として交友があったのだそうです。お父さんは、小田桐校長の葬式で友人代表として弔詞を読んでいます。

５冊の「鶏肋抄」、「随心ノート」、「草沢の心」、「石の言葉」

小田桐校長が文芸春秋に在籍していた頃の社長は菊池寛で、大谷さんの編集主幹は加藤謙一だったそうです。菊池寛は文芸春秋を創設した実業家で作家であることは有名です。加藤謙一は弘前市出身の編集者で、小田桐校長の話によく出てきていましたので覚えています。

大谷和子さんは私が弘前市立病院に勤務していた時に内科外来の看護師をしていました。大谷さんも、「お父さんの本ですが、私が持ってるより

も、先生が持っていた方が価値があるから」ということで持ってきてくれました。「草沢の心」と「鶏肋抄」も一緒で、これらの本も何の遠慮もなく頂きました。ありがとうございました。「草沢の心」には、友人の大谷清蔵さんのための小田桐校長の署名が入っていました。

昭和39年、弘前実業高校の校長時代に出版した「石の言葉」にも名前だけですが署名がありました。ただ残念なのは、この「石の言葉」も頂いたものなのですが、誰から頂いたのか思い出せないことです。もしも、これを読んでましたら、どうか名乗り出て下さい。お願いします。

私の高校時代に小田桐校長が校長講話と題して話をした内容が書かれている「鶏肋抄」はこれで５冊になりました。青森市の古本屋にあったものとアマゾンマーケットプレイスに出ていたものをこれまで３冊買いました。とても、古本屋の奥に他の本と一緒に置いて欲しくないのです。

「鶏肋抄」の中に鶏肋の意味が書かれています。鶏のあばら骨は食うほどの肉はないが、棄ててしまうには惜しい気がするものである。他人の目には一顧にも値せぬ代物なのに、当人の身になってみれば棄て去るにはなにか惜しい。

笹田貴史先生が地域医療研修

弘大附属病院初期研修医、医師になって２年目の笹田貴史先生が地域医療研修を行いました。医師免許を取得した後、２年間の初期研修のプログラムの中に地域医療研修というのがあります。大きな病院だけでなく、診療所や小さい病院での研修が義務付けられているのです。

１年目は黒石病院で研修を受けました。２年目は弘大附属病院での研修です。これまで一通りの研修を受けていますので、診療所の外来でそれを再確認することを目的にしました。そして、腹部超音波検査を経験することもその一環としました。

大きな病院であれば、すぐにCTで検査したり、細かいところまでいろいろな検査ができます。しかし、小さい診療所ではそれができません。むしろ、検査をしないで、これまでの話を聞いて身体所見を把握し、今どういう状態であるかを判断しなければなりません。

笹田先生は医学的な知識はあふれるほど持っています。しかし、それが臨床の現場で患者さんの中にどのような形で現れているかを見抜くのは豊富な経験が必要です。そして、優先順位をつけて解決して行くことが求められます。これまでは、蓄えた知識と経験を誰かが引き出してくれました。しかし、これからは、それらを自分で優先順位をつけて出していかなければならないのです。

例えば、お腹が痛い患者さんが来たとします。これまでは、「私は、１．胃潰瘍、２．急性胃炎、３．胆石、４．膵炎、５．大腸癌、どれでしょうか？」、これに答えられれば通用しました。でも、これからは、話を聞いて診察した結果、自分の中からこれらを順位をつけて引きださなければならないのです。

笹田先生は、来年４月に私の出身医局である弘大消化器血液内科に入ることが決まっています。研修期間中に福田教授に挨拶に行ってきました。私の長男の直也は消化器血液内科で働いています。話を聞くと、笹田先生とは学生時代から知り合いで、プロレスを一緒に見に行ったりしていたのだそうです。

大鰐出身の笹田先生、大鰐から来ている患者さんにも会いました。これから自分が生まれて育った地域のために頑張ってくれることでしょう。期待しています。

発　　行：　〒036-8261 青森県弘前市茂森新町1-6-4　沢田内科医院　院長　沢田美彦
ホームページ：　http://www.sawada-naikaiin.com/　TEL 0172-37-7755　FAX 0172-37-7788